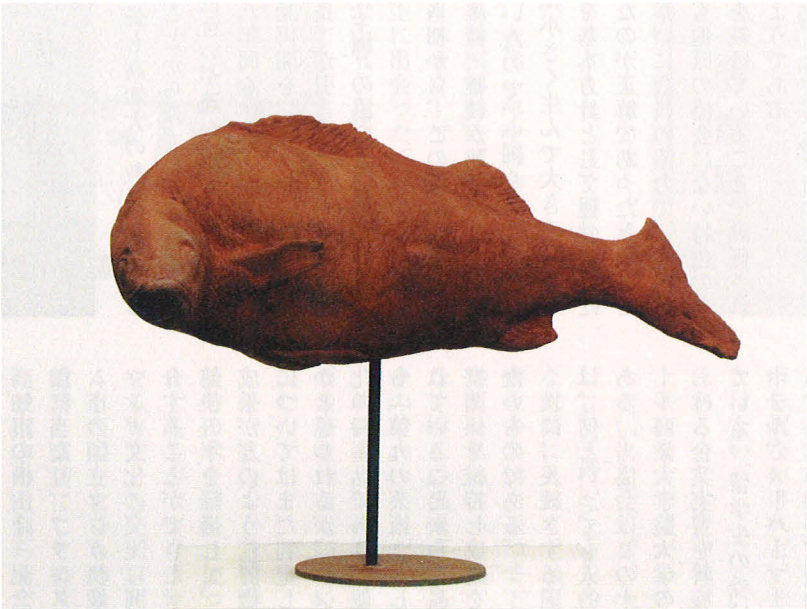
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2008年７月　NO.144



「老鱸」 西本寛之

〈もくじ〉

二十五周年を迎える高知日仏協会 …… 佐竹茂市　2
美しきイタリア音楽の夕べ …… 須賀陽子　3
高知県の課題 －社会経済の側面から考える(1) …… 福田善乙　4～5
草の根国際文化交流から生まれたもの …… 高坂優子　6～7
叙勲と高知出版学術賞 …… 澤村榮一　8～9
言葉の現場から⑩　高知の若者が発するロック …… ＯＫ電算機　10
高知のギャラリー⑥　FOOD&GALLERY Santé …… 筒井孝枝　11
隆一が描いた花々 …… 奥田奈々美　12
５月～６月の事業から …… 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

二十五周年を迎える高知日仏協会

佐竹茂市

高知日仏協会が設立されて今年で二十五年になる。そもそも日本とフランスの国交が始まったのは、遠く江戸時代末期の一八五八年に遡るので、国レベルでは今年は、「日仏交流一五〇周年」と銘打った芸術・文化など各方面にわたる記念事業が展開されている。

現在、日本とフランスの友好団体である日仏協会は、ほとんどの県にある。中には百年以上の歴史のある協会も少なくないが、設立の経緯からみると、総じて個人的な交流がキッカケで始まったところが多い。例えば隣県徳島の協会は、日本の大富豪の息子で一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、フランス社交界で勇名をはせたバロン・薩摩次郎八が晩年、夫人の故郷、徳島に移住し終焉を迎えたことが協会設立の契機である。

高知日仏協会は、一九八三年の設立当初の会長は西沢弘順高知大学長、事務局長も高知大の教授が就任していたことからみても、やや"官頼み"の色合いが濃かったが、一九九二年に八年間も休眠状態であった協会の活動再開を、私（当時は龍馬学園理事長）が引き受けてからは、完全に"民主導"の協会となっている。

私は当初から、この種の会は設立よりも維持・継続が難しいことがわかっていたので、「細く長く続けること」「小さく生んで大きく育てること」を基本方針として運営に当たってきたのが正解であったと思っている。幸いに会員の協力で、小さいながらも他県の協会にない特色のある事業を続けていることで評価されているようである。

当協会も他の協会同様、映画鑑賞や料理・ワインを楽しむ会、シャンソンその他の音楽会、訪仏旅行なども行っているが、これらで会員の興味や協力を維持し続けることは限界があるので、より高知らしくて長続きする事業として取り組んできたのが、マンガによる交流であり、また留学生の継続的受け入れである。

マンガについては言うまでもなく、高知市の横山隆一記念まんが館の開館に当たり、フランス・アングレーム市の国立マンガ映像センターとのマンガ文化の交流に関する提携を仲介することができた。まんが館も開館後五年を経過して、提携の意義や成果がどのように評価されているかについてはまだ判定し難い面もあるかと思われるが、マンガは土佐の文化の特産品であり、他方フランスでも「第九の芸術」として高く評価されていることから、長い目で見て提携関係を維持し成果をあげてもらいたいものである。

次に、長続きする国際交流の基本は、何といっても人的関係、交流である。当協会はこの十数年間、トゥール商業大学院大学の学生の高知における企業実習を斡旋し、好評を得ている。留学生の受け入れ企業は、ホテル、スーパーマーケット、放送局、書店のほか、横山隆一記念まんが館でも受け入れてもらった実績がある。そのほかオゼンヌ高校の生徒十七名の高知南高校での受け入れも斡旋した。トゥールからの留学生が、これも当協会が紹介してパリに開店したブックオフ・パリ店でアルバイトとして活躍してくれているのもうれしい便りである。

以上、当協会設立の経緯と、二十五年間における主だった実績を略述したが、高知とフランスの密接な関係は、既に明治初年に始まっているといっても過言ではない。それは明治初年に二年半近くフランスに留学し、帰国後ルソーの「民約論」を翻訳して、高知から起こった自由民権運動の思想的裏付けを行ったのが本県出身の中江兆民だからである。その意味でも兆民の築いた日仏交流の思想的礎を再認識するとともに、今日でもフランスから芸術・文化・ビジネスはもとより、政治、外交等の面でも依然として学ぶべき点が多いので、息の長い交流を続けていくべきであろう。

なお、来たる十月三日、四日には、二十五周年記念事業として、駐日大使や総領事のほか、パリの日本文化会館前館長の磯村尚徳氏の講演会、ブルターニュ地方のホルンの演奏会なども計画しているので、ぜひご来場いただくよう願っている。

（さたけもいち／高知日仏協会会長・龍馬学園学園長）

美しき イタリア音楽の夕べ

須賀陽子

六月二十日（金）、梅雨で薄曇り、そしてついには小雨模様のなか、かるぽーと大ホールで、東京芸術大学名誉教授、山岡耕筰先生率いる"パガニーニ合奏団"の演奏会（高知市文化振興事業団主催）が開かれた。

若々しい教え子たちに囲まれた先生は、「皆さま今晩は。普通演奏会では、指揮者は、こうやって舞台に出て来て、おじぎをして、指揮をして、こうやって帰って行って、終始だまっている。それではつまらんので、私は、お話をします」と挨拶をされた。

会場いっぱいの観客は、「ムムッ！これは何か知らんけど、おもしろい。この指揮者は何だか楽しい。何かいい事が起こるに違いない」と思ったりして、ワクワクして身を乗り出して拍手し、嬉々としはじめた。

この季節の美しい紫陽花の花のような奏者たちの音色は、それは柔らかで美しく、また力強く、私たちの身体にしっとりと、良く響いて伝わってきた。

私は、大学一年生の時に、ドイツ留学から帰国されたばかりの、水色のフォルクスワーゲンに乗っていらした先生に出会った。

先生と同じく宿毛出身の先輩に、中央線に乗って、先生のお宅にも連れて行ってもらった。長いお家の端っこの部屋で、はじめてレッスンをしていただいた。その日以来、自称"先生の特別な弟子"をしている。申し訳ないけれど、一日も忘れたことはない。

ある日、「本当にヴァイオリンが上手になる方法がある」とおっしゃっていた先生が、次の年の夏に、「これを奏（ひ）いてごらん！」と、大きな封筒に入れて、出版される前の手書きの楽譜を送って下さった。そのことは私にとっては、たとえようもなく嬉しい出来事であった。そして、その時ハッとした。

約四十年前にも、こうして手書きの楽譜をいただいていたことを思い出した。

今、私は、「音階練習帳」と題するその本を、毎日使って練習している。先生が、ヴァイオリンが上手になる方法として、日夜、実践され尽くしたこととひらめきを、きちんと言葉と楽譜にして書き留めて下さった教則本のそれらを、一つ一つクリアしていった先には、誰でも、簡単に、苦労なく、完璧な音で、パガニーニを演奏することができる。この私でも、奏きたいと思ったら奏けて、まだテクニックにも身体にも余裕があると感じとれる方法を、丁寧にわかりやすく書き留めて下さっている。

たいへんな夢と情熱を持って、第一線で、教育と研究、演奏と講演にと打ち込んでこられた山岡先生。ここ数年の疲れは吹き飛ばして、私たちのために、未来の子供たちのために、次の「秋」にも、次の「冬」にも「春」にも、教え子たち全員を引き連れて、高知に帰って来てほしいと思う。

ご自身の主宰する室内楽団に「"パガニーニ"合奏団」と、二十世紀最大のヴァイオリニストの名を冠した先生の強い意志と自信を、私ははっきりと見ることができる。そして、「皆さま、今晩は」と言われた先生の声。その響きは、一瞬にして客席の老若男女を明るくさせた。それは、先生がすでにすばらしい名器となられ、かのパガニーニを超えたところにいらっしゃるということだと感じたのは、この私だけではなかったと思う。

なつかしい西澤さんのチェンバロも華を添え、音楽と人の出会いと、感動と喜びに満ちあふれた、最高の一夜でした。

（すがようこ／徳島文理大学音楽学部准教授）

高知県の課題

――社会経済の側面から考える（1）

■高知県の人口問題を考える視点■

福田善乙

人口問題はいま

日本の人口は第二次世界大戦後一貫して増加していたが、二〇〇五年の一億二七七七万人から減少に転じ、二〇三五年には一億一〇六八万人になることが予測されている。

高知県の人口は一九九〇～九五年段階に人口の絶対的減少の時代に入り、二〇〇五年に七九万六千人と八〇万人を割り込み、二〇三五年には五九万六千人と六〇万人を切ることが予測されている。

このなかで高知市の人口は戦後一貫して増加し続けて二〇〇五年三四万八九九〇人（春野を含む）に達するが、それ以降は減少に転じ、二〇三五年には二九万四三六三人と三〇万人を切ることが予測されている。それでも高知市は県都として、高知県人口の二〇〇五年四三・八％から二〇三五年四九・四％を占めることになるのである。

高知市の人口増加は高知県の中山間地域からの流入に多く依存しており、高知県の動向と一体化している。したがって、ここでは高知県全体の人口の問題を中心に考えていく。

現在の高知県の人口は減少し過ぎており、復元していくことが必要になる。私は高知県の自然・環境条件や社会的・経済的条件、これまでの人口の推移から、高知県の人口は少なくとも八〇万人、高知市の人口は三五万人が適正規模ではないかと想定している。それでは高知県の人口や高知市の人口をどのように復元していくことが必要だろうか。

総合的な視点を

第一に、人口問題を総合的に把握し、総合的な政策として考えることである。

人口が増減する要因としては、①自然増減（出生者数　死亡者数）と②社会増減（転入者数　転出者数）の二要因しかない。このため、結局は①出生者数をどのように増加させるのか、②死亡者数をどのように減少させるのか、③転入者数をどのように増加させるのか、④転出者数をどのように減少させるのか、の四つの要因をバラバラではなく、総合的に政策化することが大切である。

国の政策は縦割り行政が中心になっており、バラバラの政策になっていることが多く、これを横の連携で総合化していく視点と力量が問われている。

出生者数を増加させ、死亡者数を減少させるためにも、転入者数を増加させ、転出者数を減少するためにも、まず就労の場、雇用の場、仕事の場を拡げることである。それを中心に安全で安心できる生活の場をつくるネットワークが必要になっているのであり、それを総合的な政策にすることが大切になっている。

このとき、定住人口の増加だけでなく、交流人口の拡大を通じて定住人口を増加させる視点・政策も大切である。

過去の教訓を生かす

第二に、高知県の人口をみると、常に減少してきたのではなく、人口が増加した時代があり、その教訓から学ぶことである。

すなわち、高知県の人口は一九七一～八五年の十五年間一貫して増加しているのであり、この時期に打ちだされた政策や智恵から学んでいく必要がある。この時期の人口増加要因は後のグローバル化のなかで多くが消滅していかざるを得なかったが、その時に開発または導入された産業政策を充分生かすことが大切になっているのである。現在最も人口が少ない大川村も「ふるさとむら公社」を中心とする政策の展開で、一九八五～九〇年には人口が増加しているのである。

マイナスをプラスに

第三に、人口の減少や高齢化が先行しているということは不利な条件であるが、それを有利な条件へ変化させていく視点が大切である。マイナスをプラスに変化させる視点である。

人口の減少は確かに地域を直接支える担い手が減少することだから、それ自体は不利な条件となる。しかし、たとえば転出者を高知県から流出する人口ととらえるのではなく、高知県から全国へ、さらには全世界へ派遣した人材だととらえるならば、プラスの要因になる。すなわち、これまで県外へ派遣した高知県人と高知県に在住する高知県人が力を合わせて高知県の活性化に協力すれば、高知県の未来は大きく開かれるであろう。

先行する有利さ

第四に、高知県が人口減少や高齢化で全国に先行しているということは、後に日本全体が歩む道の先頭を走っているということであり、この有利な条件を生かすことである。

すなわち、これからの日本が歩む新しい時代のビジネスチャンスに恵まれているということであり、それを先に実行することができるということである。

高知県の行く末が日本の将来の姿を決めるという気概と誇りを持つことが大切であるし、このビッグビジネスを生かし、未来を切り開くことが大切である。

高知の出番

第五に、二十一世紀に入り、新しい価値観にもとづく経済社会システムが求められるようになり、高知県や高知市の出番が求められているということである。

これまではグローバル化のなかで、市場の論理と生存競争＝経済的効率をもとに価格（コスト）競争して生き残るという価値観を基準にした経済社会システムが中心に進行していたが、現在新しい価値観にもとづく経済社会システムが要請されている。

すなわち、それは自然・環境・生命・安全・安心・健康・癒し・ゆとり・関係・絆・循環・連携を大切にした経済社会システムであり、高知県にはピッタリした方向性である。

それゆえ、高知県は地域にある宝物＝自然・環境・生命・歴史・教育・文化・資源・技術・資本・人材を最大限に生かすことによって地域の活性化をはかることである。

沖縄から学ぶ

第六に、これからの高知県の方向性を考えるとき、沖縄県の姿が示唆に富んでいるということである。

沖縄県は一人当たりの県民所得は全国四七都道府県中四七位（最下位）、一人当たり個人預貯金残高も最下位、有効求人倍率も最下位、完全失業率は全国断トツの一位である。沖縄県は経済的にみれば最下位の部類に入る。

しかし、沖縄県の人口は日本復帰後の一九七二年以降をみても一貫して増加し続けており、一九七〇年の九五万人から二〇〇五年一三六万人へ増加している。出生率も全国一位である。しかも、将来人口でも二〇二五年まで一貫して人口が増加し続けるのは沖縄県だけである。

また、年齢構成をみても、二〇〇五年で〇～一四歳人口比率全国一位、六五歳以上人口比率全国最下位である。将来人口でみても、二〇三五年で〇～一四歳人口比率一位、一五～六四歳人口比率五位、六五歳以上人口比率最下位である。

このように、沖縄県は経済的には恵まれていないし、雇用の場も少なく、失業率が高く、所得も低い。しかし、人口は一貫して増加しているし、出生者も多いし、年少者も多い。

この沖縄県から学ぶことが多いのではないか。確かに沖縄県は米軍基地の存在など特別な事情があるが、共通する面も多くあり、教えられることも多い。たとえば、①沖縄を想う心の高さ、②生産と生活をお互いに支えあうネットワークの存在、③自然や環境を生かした産業の展開などである。

いずれにしても、高知県は高知らしい高知にあった経済社会システムやお互いの生産や生活を支えあうネットワークをつくっていくことである。

なお、詳細は四銀キャピタルリサーチ『四銀経営情報』（第一〇二号、二〇〇八年五月）の拙稿を参照してくだされば幸いです。

（ふくだよしお／高知短期大学名誉教授）

草の根国際文化交流から生まれたもの

―ノイウルム・州ガーデンショウ・日本文化紹介コーナーでの参加交流―

高坂優子

高知で、「ジャパンフラワーフェスティバル二〇〇八inこうち」が開催されていたのと同じ時期に、ドイツのもう一つの花博に参加し、交流してきた。

バイエルン州ノイウルム市主催の州庭園博覧会で、歴史あるこの催しは各都市が受け持ち、三十年ぶりにノイウルムに巡ってきた。四月二十五日から十月五日までの開催である。五月十六、十七、十八日に、ノイウルム市在住の生け花教授ヘス幸子さん担当「アジア週間日本紹介コーナー」で、生け花と書の展覧会をして、茶道、折り紙、琴のデモンストレーションをした。日本からは、お琴の三人が長崎から、他七人は高知から参加した。

ノイウルムはドナウ河畔の人口約五万の都市で対岸には、姉妹都市のヴァーデンヴュルテンヴルグ州ウルムがある。ウルムは、私が幸子さんと二十年以上前に出会い、その後一回目の「花と書展」をした地である。

ウルム市立歌劇場の楽団員を中心としたウルマーカンマーアンサンブルは、一九九〇年から高知公演をしていて、今年七月末にも来高する。日本からの一行の何人かは、この劇場でオペラを観、楽屋を見学し、場内の団員用パブで歓談した。ウルマーシュパッツェンという少女合唱団も県下の高校生達と心に残る交流をした経緯もある。

十八歳のヘス千草さんもこの合唱団の団員で、彼女と友人三人が十五日の前夜祭に日本語で「さくら」など二曲を合唱し、磯村寿彦・みどり夫妻、親日家のヤノシュさんはじめウルム在住の日本人音楽家らが、「ふるさと」を演奏した。

赤と白の服で臨んだウルム第三市長と、招待客、日本人会の人々、関係者、そして来場者らが、リラックスした感じで参列した。高知県知事、市長、ノイウルム市長に続いての私達の挨拶の最後に突然、一番年長の生け花の生徒さんが、感動した様子の謝辞を述べて下さった。日本人の書とドイツ人の生け花の共同展は、場所を変え三回目となっている。琴の演奏もあった。和服姿の参加者が会場近くに立つと、周りに日本が出現した。場内のレストランから飲み物の出張サービスがあり、持参した柿の種、おつまみ、塩や醤油味のお菓子を、花や船の折り紙の器に盛って出して喜ばれた。

「ノイ」というのは、新しいという意味で、ウルムが歴史的建造物の多いのに対して、ノイウルムの町並みはその名のとおり比較的新しい。二つの都市を結ぶドナウ川のヘルド橋を渡って三か所ある各会場は、緑の道で結ばれて各々にテーマが掲げられている。シャトルバスも運行している。

日本コーナーは、市営グラシス公園の一画にできた。この会場は、「未来の生活と庭園」をテーマとしていて、九棟のモダンな建物が、工夫を凝らした庭のあちこちに建てられている。花と書はモデルルーム「水の上の未来の家」に展示され、折り紙コーナーは「代価エネルギーの家」に設けられた。これらは道路を隔てて向かい合って建っていた。少人数向けの広さだが真新しく、私達がここで初めての催しをした。

建物のモダンさが、かえって日本の伝統美を際立たせてくれた。前面ガラス張りの中の生け花と書は、遠くからでも人目を引き、一方の家の白い無機質な空間も、折り紙作品と書が飾られると、安らいだ親しみのある空間に変わった。そのためか途切れることなく人々が訪れて楽しんでいた。離れがたいように終日いた

前夜祭での記念撮影。中央がウルム第三市長

在独の日本人の方々や、何度も訪れる人々もいた。

折り紙を習い抹茶を飲んだ黒いパンクルックの若者達を見て、年配のドイツ婦人達は眉をひそめていたけれど、私達には外見と違って素直で可愛らしく思えた。彼らは二日目も来ていた。日本語の単語も知っていて、日本の音楽も聞くと言っていた。孫を見るようにやさしく朗らかに子供達に接していた参加者を見ていると、折り紙の手ほどきにはどうやら言葉の違いは関係ないようだった。

朝九時、築島に住み着いた鴨が一羽、待っていたかのように泳ぎ始めた。人を全然恐れていない。会場に運び込まれた四枚の畳が活躍した。一部がデモンストレーションの舞台になり、残りが入り口近くで椅子の代わりとなった。十一時と三時の二回、四〇㎡の小さな空間の二畳間で、琴、生け花、折り紙、茶道、書道の順で実演がされた。通訳の解説のもとで、外にあふれ出るほどの来場者は、一時間近くも熱心に見入っていた。終わった後、和菓子と抹茶でおもてなしをし、小さく切った「やまもも羊羹」も好評だった。三日間、六回のデモンストレーションは賑わいの中にあっと言う間に過ぎていった。三百人分用意したお抹茶はほとんどなくなった。家族連れも多く来場者はおそらく倍くらいいただろう。

生け花はドイツではもうだいぶ知られているが、琴、茶道の実演はここで初めて見た人がほとんどだったのではないだろうか。そのためか十六日の夜、別の会場でのライオンズクラブのパーティの席上、お茶のお点前と琴の演奏を披露することにもなった。

書道の実演は、以前にもしたが、磨墨、書作過程、落款印の押印までを、より熱心に見て頂いた。最後の日、何回も書道具を見て回っている来場者に声をかけたら、待ちかねたように筆をとり、一気に円や線を書いた。「ファンタジィ」と言っていた。この日のお茶席にはドイツの方も加わった。

長崎から来た琴の若手演奏家の、平常心を保った静かな姿も印象的だった。琴の演奏は素敵であったが近寄りがたい雰囲気もあり、それと比較すると、折り紙はドイツの幼稚園教育でとりあげられているせいか親しみやすく大人気だった。「私の本業は切り絵であって折り紙ではない」と最後まで言っていて、折り紙作家の先生として紹介されることに抵抗を感じているようだった佐藤さんは、そんな自分のためらいなど出す余地がないほど慕われた。二畳の大きさいっぱいの金、白、赤の千代紙を、二、三人がかりで鶴の器、白鳥、船、連鶴などに折りあげていく様子には大人までも興味深げだった。三日目の、二枚の羽に日本とドイツの国旗を貼ったアイディアも喜ばれた。作品は今も、ドイツの家庭や日本レストランに飾られている。折り方カードは、頼まれて幼稚園の先生に差し上げてきた。佐藤さんの伝えた折り紙が、これからもずっとドイツで作り続けられていくのを想像するのは楽しい。

以前は、会話ができず、ひたすら鶴を折っていた我が子も幸子さんの子供達も、生き生きと楽しそうに通訳の役割を果たしていて、それは日常会話から交流、デモンストレーション通訳、書作品の訳にまで及んだ。次世代達はこの言葉の部分をもっと解決していけるだろう。やはり相手を深く理解するのに言葉はとても大事だ。

ドイツに長く住む日本人子弟達は、一度は日本を否定する時期を経た後、日本を再発見すると聞いた。ウルム近郊に住んでいる約百人の日本人会の会員には、日本人を配偶者とするドイツ人やその子供達もいて、日本語の話せない人もいる時代になっている。

今回思いがけないことに、日本から参加した若者達が、着物を着て、自ら五つの日本文化を紹介するうちに、日本の伝統文化の良さを見直してもっと知りたいと思ってくれた。日本の多くの若者達もひょっとすると外国人並みに本当の日本の良さを知ってないのかもしれない。私達も伝えていないのかもしれない。

何度も来日して日本をより知っているドイツ人も増えてきた。私達にはあたりまえである物に注目し、価値を見出して買って帰ることもある。高知にも身近すぎて気づいていない良い物がたくさんありそうだ。

そんなことを思いながら、多くの方々に支えられ続けてきた交流のバトンタッチの時期を考えている。

（たかさかゆうこ／草の根国際文化交流ネットワーク代表）

叙勲と高知出版学術賞

澤村榮一

第十八回高知出版学術賞を受賞しての挨拶は、推薦状の到着順ということになっていた。

最初は、「歴史家の遠めがね・虫めがね」の高橋昌明・神戸大大学院教授。

つづいて、「幻の鶏　土佐ジロー20歳　スーパーブランドへの軌跡」の掛水雅彦・高知新聞社編集委員。

お二人とも、かなり長々としゃべられたが、私の挨拶は素っ気ないものであった。

――私は七十八歳です。この本には、私のここ五十年の人生がぎっしり詰まっています。拙著が、思いもかけぬ高い評価を受けて、このような名誉ある賞を頂き、大いにありがたく、うれしく存じます。

本書は、元来、高知新聞に連載されたものですが、単行本化に当たっては、連載そのままではなくて、一気に読み通せるように、さまざまの工夫を凝らしました。

その点に関しては、出版元、南の風社の細迫（ほそさこ）社長に、いろいろとお知恵を拝借しました。

きょう、この場を借りて、あつく御礼申しあげます。――

実は、この表彰式に先立って、政府が春の叙勲において、この私にも勲章をやろうというのを、断ったばかりだった。

そこで、挨拶の冒頭でこの一件に触れ、多年にわたる私の研究・執筆活動が、政府に認められるよりは、高知県民・市民の皆さまから、このたびのように、高く評価される方がはるかにうれしい――と述べるつもりであった。

表彰式の担当者にあらかじめ相談すると、「ご挨拶は、なるべく簡潔にお願いします」とのことで、このくだりは割愛することになった。

なぜ、勲章を断ってしまったのか？

私の友人の多くは、「せっかく政府がやろうというものを、なにも断らなくても…」と言う。

だが、少数派ながら、「いかにも君らしくていい話だ」と言ってくれた者もいた。

ことの次第はこうである。

三月下旬のある日、私が三十年ほど勤務したかつての職場の事務担当官から電話がかかってきた。

「今春の叙勲で、勲章がもらえます。つきましては、〈戸籍謄本の原本〉、〈論文・著書の一覧表〉、〈所属学会のリストと各学会での役職〉、…。

この役職によって、いかに学会に貢献したかを強調すれば、勲章の等級が上がります。」

このあたりまで聞いて、次第にばかばかしくなってきた。

当人の功績は、先方が査定すればいい。

私の性来の〈いごっそう精神〉が、頭をもたげてきたのである。

しかも、先方は五日間ですべての書類を整えて、郵送せよ――と言う。

私は、右脚に義足を装着するようになって以来、「あわてず、あせらず、のんびりと」というスロー・ライフを心掛けている。

市役所へ〈戸籍謄本の原本〉なるものを取りに出かけるだけでも、介護タクシーをやとって、一日仕事である。

残りの四日間、毎日、ややこしい書類を作成する作業を考えるだけでも、うんざりする。

ついに、「もういいです。叙勲はお断りします」ということになった。

その後、ほどなく、〈後期高齢者医療制度〉というのが実施されることになり、これが決定打となった。

よくぞ叙勲を断った！

右手で、まるで自分のポケット・マネーのように、国民の血税を浪費しながら、左手で高齢者や、障害者を、こともなげにいたぶる、この国の政治家や官僚たちの、思い上がった所業は断じて許しがたい。

かつて、〈敬老の日〉という祝日があったと思う。

手元の『記念日・祝日の辞典』には、「一九六六年に制定された国民の祝日の一つで、多年にわたって社会に尽くしてきた老人を敬愛し長寿を祝う日」とある。

いまや〈後期高齢者医療制度〉と共に、〈軽老〉の時代がやってきたらしい。

なんの説明もないままに、私たちはバッサリ斬り捨てられた。

だが、知らなかったのは、私たちだけで、四月一日の施行日に向けて当局は着々と手を打っていたのである。

三月二十二日に、高知市役所の〈保険医療課　後期高齢者係〉から、私たち夫婦の〈後期高齢者被保険者証〉が送られてきた。

われらが高知市役所の職員は、きわめて有能である。この迅速な対応には驚嘆した。（これは決して皮肉ではない。）

だが、〈後期高齢者医療制度〉という名称が不評であると知った政府は、すぐに通称〈長寿医療制度〉と改称した。

このような、子供だまし、いや老人だましの、空々しい小細工を弄するのは、私たちを愚弄するものである。

私は、現在、〈介護難民〉のひとりである。

身体障害者になっても、〈要介護〉ではなくて、〈要支援1〉と認定され、毎月4970（ヨクナレ）単位支給されることになっている。

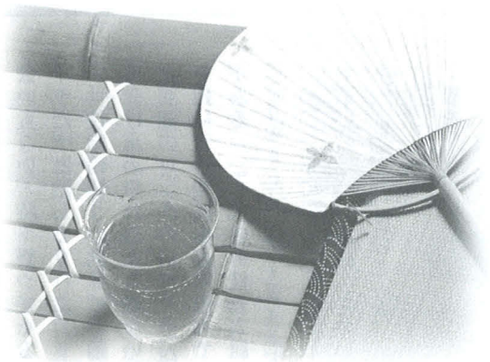
しかし、この単位数では、ヘルパーによるすべてのサービスをまかなうことができず、毎週二回、近所のスーパーへ食料の買い物に行ってもらうたびに、一時間一三〇〇円、自腹を切らなければならない。

介護保険料は、毎月、年金から天引きされているから、これでは、まるで〈やらずぶったくり、いや、ぼったくり〉ではないか！

そのうえ今度は、〈長寿医療〉費も、年金から天引きされることになった。

しかも、その額は年を追って増加する仕組みになっているから、「金の切れ目が、命の切れ目」「老人は、お国のために、早くあの世へ行きましょう」ということになる。

（さわむらえいいち／高知大学名誉教授）



依光裕　編著

珍聞土佐物語（上巻・下巻）

―五十人の語り部たち

親から子へ、孫へ語り継ぎたい土佐咄

四六判・各1,630円

言葉の現場から⑩

高知の若者が発するロック

ＯＫ電算機

「その通りなんだよなぁ」と、うなずくしかなかった。

五月、高知市で開かれたある講演会。講師は言った。今、わたしたちは世代ごとに輪切りになって生きている、と。若い人は若い人だけでコンビニエンスストアの前でたむろしている。年配の人々はゲートボールや生涯学習の場に集い、若いお母さんたちは、わが子に同い年ぐらいの子と遊ばせてあげようと公園へやってくる。

つまり、わたしたちは同質の者が集まる集団の中だけで生きており、そこでは言葉が、思いが、世代を超えて伝わることはない、と。

同じことを考えていた。一九六八年生まれのオジサン新聞記者が、若い人とつながれないか。何かに懸命に打ち込んでいる若い人々が認められる、知人から「新聞に載っちょったね」と声を掛けられる、そんな紙面はできないか。

テーマは、切り口は？　これまで新聞には登場しなかったような人がいい。ロックバンドはどうだろう。ギターやドラムで大きな音を出し、汗だくになって歌っている彼、彼女は。わたし自身、会うチャンスはなかった。よし、これでいこう―そう決めたのが二〇〇五年春。以来、音楽のページを作り、轟音の下に十代から三十代の人々が集まる場所が、わたしの「仕事場」となっている。

彼、彼女たちの奏でるロックについて話を聞く。通うにつれ、いろんな言葉を掛けてくれ始めた。オレ、新しい歌作ったんですよ!!　今日のわたしたちのライブ、どうでした？

やがて話題は日々の暮らしにも及ぶようになった。学校になじめなかった男性。高校中退で仕事はアルバイト。収入も少ない。音楽をやり続けていいのか…未来の自分を描けずにいた。ある女性は、学校に通っている時は同年代とワイワイできたが、社会に出るとそんな時間も新しい出会いもない。時々襲ってくる孤独がイヤだ、と話してくれた。

世代で輪切りの世界。年齢を超えて受け止められることのない言葉。

高知のロックの中に、そんな現状を指摘し、突破をもくろんでいる歌がある。二十代の男性五人組バンド「Ｎｏｗｅｅｄ（ノーウィード）」が二〇〇一年に作ったＣＤに収め、今も歌い続けている曲「ささいな気持ち」。歌詞の一部はこうだ。

夢を忘れかけてる人
誰も信じられない人々
自分を責めてばかりの人
弱音を吐いてばかりの人々
毎日を退屈に
繰り返し生きていく
昔見た夢なんて
忘れかけているころさ
（中略）
夢を忘れかけてる君へ君へ君へ
世代超えて伝えたい
ささいな気持ちを忘れずに

ステージ上、汗だくになっている五人。会場に集まった十代も、二十代も、三十代も一緒になってこの歌を大合唱している―そんな光景を何度も目の当たりにした。それは、ささいな気持ち、もっとダイレクトに言えば「夢を持とうよ」という言葉を、明日を生きる支えを、共有している光景のように思えるのだ。

◆

今回から三回、高知の若者たちが発しているロックを、言葉を、紹介します。人生経験豊富な読者の皆様には、稚拙に感じられるでしょう。底の浅さが鼻につくと思います。ですが、これが「高知の今」をわたしたちとともに生きる若い人々の、表現の一つなのです。それを認めるところから始めてやっていただければ…そう願ってやみません。

（おーけーでんさんき／新聞記者）

高知のギャラリー⑥

FOOD&GALLERY Santé

筒井孝枝

ギャラリーサンテは、必然的に生まれたギャラリーだ。

三年前、イタリアンレストランだったサンテを弟から引き継ぐことになった。京都で修行してきた調理師の主人と二人で営むにはちょっと広い空間だった。経費削減と考え、客席のスペースを半分にし、半分は白い壁をつくり、「四角い白い部屋」にしてみた。

恩師や友人の助言で、スポットライトもつけてみた。なかなか、いい空間になった。

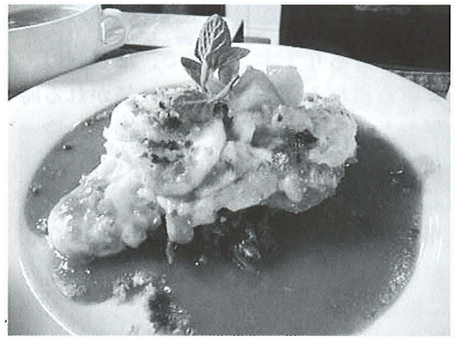
小さいころから絵を描いてきた私の作品と書家である母の作品をレイアウトすれば、ランチを食べにきてくれた常連さんも楽しいだろうと、そんな軽いノリのギャラリースペースだった。

ところが、オープンしてみたらこの「四角い白い部屋」が好評だったのだ。さっそく、私の版画の先生が展示をしてくれた。そして、見にきてくれた作家さんからも展覧会の要望がくるようになった。

私自身が作家ということもあって、いっしょに展示を楽しめることができた。

「高知はせまいねぇ～。」

不思議な出会いがいくつもあった。長い間、レストランの常連さんだった人が作家さんだったり、物作りが得意だったり、と驚くほどサンテに集まる人には、アーティストが多かったのだ。



画家志望だった筒井シェフ。今は、“食のアーティスト”

「趣味で作ってた作品が、家中にたまって…」「気のあう仲間と展示をしてみたい」と、気軽に利用してくれる作家さんから、巨匠といわれる作家さんまで、ほんとに幅広い。それぞれの思いのある展示が楽しくて、毎回、新しい発見がある。

それが刺激になり、私自身の作品も充実してきたような気がする。仕事の合間の制作はとてもパワーが必要だったけれど、ギャラリーでの展覧会が私の励みになっていた。

今まで知らなかった分野の作家さんたちと出会い、知識も得ることができた。またまた、私の口からそれを伝えることもできた。

アートの“和”

「アートってすごいんだ!!」

身も心も健康にしてくれる。生きがいにもなる。人間の生活には欠かせないものだとも思う。

今、世間では、考えられないことが多すぎる…。だから、アートを使って何とかしようという人たちが増えているような気がする。ギャラリーサンテでは、そんなお手伝いができればと、日々願っています。

「きっと、ハッピーになれるよ。サンテに遊びにきてみいや!!」

（つついたかえ）

FOOD&GALLERY　Santé
高知市高須新町二丁目二四―六
高須電停前
電話〇八八―八八四―五二二
http://www.d.pikara.ne.jp/takabeetan/

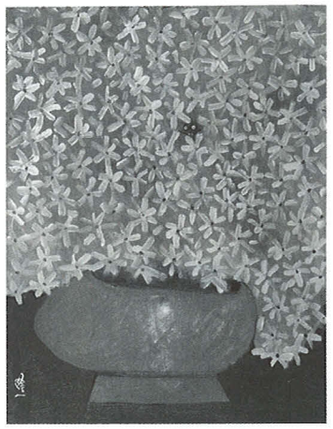
横山隆一記念まんが館企画展「隆一 はなこばこ ～第２回所蔵品展～」に寄せて

隆一が描いた花々

奥田奈々美

画面いっぱいに咲き誇る桃色の花。よく見ると、その隙間から小さな目と歯が覗いている――この目は花の精か、はたまたいたずら好きの小人か。横山隆一の油彩画作品「花の目」からは、そんな想像力をかき立てられます。

まんが家として著名な隆一ですが、油彩画・水墨画などの絵画作品も多数残していることは意外と知られていません。「油絵画家だと自称しても、漫画家というレッテルを貼られると、もう何をやっても余技であり遊びである」と自ら述べていますが、そのユーモアあふれる作品群には、まんが家としての表現力が存分に活かされています。



「花の目」

横山隆一記念まんが館の数万点にも及ぶ所蔵資料群の中にも、油彩画が多数含まれています。今夏の企画展は、来年横山隆一生誕100年という記念の年を迎えるのに先駆けて、所蔵品の油彩画を中心に展示することにしました。高知県下で開催中の「花・人・土佐であい博」に合わせて、テーマは「花」。所蔵品展は２回目で、「隆一 はなこばこ」という展覧会名は、2003年に開催した第１回所蔵資料展「隆一TAKARABAKO（たからばこ）」にちなんでいます。

花が描かれている隆一の油彩画20余点のうち、半数以上は女性が主役です。花かご、花輪、花帽子。鮮やかに咲き誇り画面を華やかにする花もあれば、そっとアクセントとして楚々（そそ）とした女性の美しさを引き立てる花もあります。一方で、油彩画のモチーフによく現れるピエロとともに描かれる時には、賑やかで楽しい一面もみられます。隆一の描く花々は、多様な表情をもっているといえるでしょう。種類も様々で、中には造花や、空想上の花も登場します。細部に囚われず大胆に描く造形は、余分な線を捨て省略を極めるまんが作品に相通じるものかもしれません。

「花散る」

この簡略化は、水墨画にもみられます。隆一は、水墨画に水彩絵具で彩色した、いわば墨彩画を好み、桜、花菖蒲、紫陽花など、濃淡ある墨色に柔らかい彩色を加えて穏やかな日本の花々を描き出しました。特に桜を描いた作品は多く、表現方法を模索した習作も残っています。鎌倉の自宅の庭に桜を育て、毎年200人以上に案内状を出し賑やかに花見を催していた隆一。桜の花に対する思い入れも人一倍だったに違いありません。花見のエピソードはその随筆の中でも数多く登場しています。

その他にも、まんが、絵本、挿画と、隆一の多様な創作活動の中で、花は幾度となく登場しており、生活に密接した存在であったことがわかります。情緒豊かな作品群からは、隆一の花に対する愛情が伝わってくるようです。

（おくだななみ／横山隆一記念まんが館学芸員）

隆一 はなこばこ ～第２回所蔵品展～

入場無料

開催場所／横山隆一記念まんが館 企画展示室
開催日時／2008年7月19日（土）～8月31日（日）
9:00～18:00
休 館 日／毎週月曜日（但し、7月21日は開館）

主催／（財）高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館
【お問い合わせ】
〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館
TEL／088-883-5029 FAX／088-883-5049
URL／http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/

高知市文化プラザ かるぽーと 5月～6月の事業から

第60回 高知市展

美術体感イベント あなたダビンチ ぼくピカソ

5月24日（土）に開幕した今年の「高知市展」は、60回の記念としてオープニングセレモニーの席上で、全10ジャンルを代表するアーティストが1文字ずつ寄せ書きを行いました。10mにも及ぶ“祝60回市展おめでとう”の寄せ書きは、最終日の6月8日（日）まで市民ギャラリーの会場入り口に飾られ多くの人の注目を集めました。

市展会期中の6月1日（日）には、小中高生を対象とした美術体感イベント「あなたダビンチ ぼくピカソ」を開催。例年子どもたちが楽しみにしているこのイベントは、今年も受付前から行列ができる盛況ぶりで、1000人近い人が会場を訪れました。7つのコーナーを設け、植木鉢に絵を描いたり、オリジナルキーホルダーやワイヤーネックレスを作ったりと、子どもたちにとって、たっぷりと美術に触れる一日になりました。

発表と鑑賞の場を市民に提供し続け、また、市民の手でつくられている高知市展は、美術の楽しさや面白さを根付かせようと、これからも種を蒔き続けていきます。

かるぽーとひえこらぼ キャンドルナイト2008 CANDLE NIGHT 2008

6月21日（土）、3階ガレリアにおいて、高知県地球温暖化防止活動推進センター、環境活動支援センターえこらぼとの共同主催事業「キャンドルナイト2008」を開催しました。

“キャンドルナイト”は毎年夏至と冬至を中心とした期間に行われ、照明を消し、キャンドルの灯りのなかで、省エネルギーや地球温暖化防止について考える取り組みとして全国に広がっています。かるぽーとでは昨年の夏至に続いて２回目の開催となりました。

450個のキャンドルが灯された会場では、〈アースディズシンガーズ〉によるアカペラコーラス、高知こどもの図書館スタッフによる本の朗読、〈木々クラブ〉〈moroco（モロコ）〉のアコースティックコンサートが行われました。

約100名の参加者は、揺らめくキャンドルの灯と心地よい音楽に包まれた空間で、それぞれがリラックスした時間を過ごしました。

高知を撮る

真夏のハプニング

（平成19年　高知市梅ノ辻）

第24回写真コンテスト入賞作品

酒井　良昌

踊り見物の車イスが電車の軌道にはまり、会場整理の男性に助けられる。よさこい祭りでのハプニング。

「引き際」

風俗歳時記

「引き際」は難しい、これは最近の実感。前首相や現首相のことだけではない。

年齢を重ねることによって生じてくる問題の一つは自分の引き際がわからなくなること、なのかもしれない。「できる人」と自他共に認められている人の場合はなおさらである。どんな人にも一律に適用される「定年」という制度はそういう意味では一定の効用があると思う。

ところで「クロネコヤマト」を一代で築き、様々な法的規制等をクリアして「宅配便」という仕組みを作りあげた社長（名前は失念した）がいた。彼は、重役会で自分の意見に反対するものが誰もいなくて、何でもいいなりになってしまった状況を嘆き、これでは会社の将来がないと判断した。そこで、社長自らに定年を設けることを決意し、「社長定年制」を重役会に提案した。その場でメンバーの誰一人からも反対意見は出されなかったという。「一人くらい反対意見があっても良さそうなものなのに」と少し寂しい思いをしたそうだが、けだし英断であったと思う。

人生にはその流れを大きく変える局面がいくつかあり、それを区切りに「第…の人生」と言われる。例えば「退職」はある「職業人生」の終わりではあっても人生の終わりではなく、新たな人生の始まりでもある。かつては「隠居」という仕組みがあった。落語などには様々な「横丁のご隠居さん」が登場してくるが、概して悠々自適ですてきな人生を送っているように思われる。

昨今、後期高齢者医療や年金問題を例に出すまでもなく、とても悠々自適ではいられない状況にあって、「隠居」などという呑気なことを言っていられないが、まだ判断力のあるうちに自らの引き際を一旦定め、もう一つの人生（私の場合、これがおそらく最後の区切りで「第六の人生」か）を歩み始めようと思っている。

（江西　縁）

景観考

タケムラナオヤ

電車通りの景

意外とこの道は好きだ。景観コントロールが殆どない高知市でも、戦後の良心ある時期に高さが規制されたこの道はスカイラインがすっきりとまとまって風格がある▼都市の景観の魅力は、混沌と調和にその源泉がある。日曜市やひろめ市場の雑踏はもろにアジア的で豊かだし、こうした道には豊かさはないけれど揺るがしがたい信頼感を醸す。かたや商いの精神が丸出しの風景、かたやお互いの建物との和合を気遣う風景▼むろん商い丸出しとて隣のことを気遣わぬわけではない。隣あってのうちだから、隣の垣根を乗り越えるような真似はしない▼そう思うと、郊外店が破壊的に巨大な看板や原色まみれの店構えをするのは、合点がいくのだ。

風伯

長寿税

医療費がかさむからと一方的に年金から天引きするというのは、どう考えても釈然としない。

これでは、国としてのビジョンがあまりにも無さ過ぎるのではないか。もっともその国をつかさどる政治家を選んだのは自分たちであり、そのツケが結局現在の自分たちに返ってきているともいえる。

後期高齢者医療制度がこの春から始まった。制度がスタートしたその日に「後期高齢者というのは失礼だから」と「長寿医療制度」に変更された。あまりの場当たり的行動に、呆れるばかりである。それにしても、後期高齢者と呼ぼうが長寿としようが、これまでせっせと払ってきた医療保険が逼迫しており、年寄りは

とは言え、日本はいつからこんなに無策で場当たり的な国になったのか。それだけではない。大国の顔色を窺いながら金の援助ばかりをしている日本は、正に成金の国に成り下がっているのではないか。技術大国などといってあぐらをかいているうちに欧米諸国だけでなくアジアにさえ追い越され、その後塵を拝そうとしているのが、いまの日本なのではないか。

今年八十五歳になる友人は、この長寿医療制度のことを「長寿税」と呼び、「長生きをするから余分の税金を払わされる」と嘆いていた。日本語で長寿とは「長生きを寿ぐ」という美しい精神がある。その精神はもはやこの国には無い。この制度は、おそらくこのままでは長くは続かないのではないか。すると、またなにか対症療法的に徴収する策を弄するのだろうが、そろそろ国を思い国の百年の計を考える政治家が出てきてもよさそうなものだが。

（霖）

MUSEUM SHOP

Kochi City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods
Artist goods
Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「老鱸」

西本寛之

老いは残酷に生を奪い去る。体は錆び付き精神は朽ち果てる。――本当にそうか？

否、ヤツラはその代わりに武器を手に入れる。元気になる訳ではない。しぶといのだ。体力の衰えを経験で補い、危機を知恵で乗り切る。ヤツラはしたたかに、そしてしなやかに荒海を自由に泳いでみせる。そして、側で途方に暮れる若者を尻目に、どうしよらあ　と、細い瞳の奥で今日も笑っている。

（にしもとひろゆき／兼業彫刻家）

文化高知 No.144 [隔月発行] 2008年(平成20年) 7月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

9/17(水) 開場▶18:00 開演▶18:30 高知市文化プラザ大ホール

料金(全席指定)	
S 席(1・2階)	10,000円
A 席(3階)	9,000円
~~第2バルコニー席~~	~~5,000円~~
~~第3バルコニー席~~	~~3,000円~~
第4バルコニー席	2,000円

■前売り券販売所
高知市文化プラザミュージアムショップ… 088-883-5052
高新プレイガイド…… 088-825-4335
高知大丸プレイガイド…… 088-825-2191
高知県立県民文化ホール…… 088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ…… 088-866-8118

※バルコニー席については高知市文化プラザでのみ販売いたします。
※未就学児童の入場はご遠慮ください。
※身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名は、左記料金より*割引でご購入いただけます。

■通信販売
直接購入が出来ない方は通信販売をご利用ください。必ず電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座[加入者名:(財)高知市文化振興事業団 口座番号:01680-5-14869]に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金ください。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

主催:財団法人高知市文化振興事業団・高知新聞社　助成:財団法人地域創造
後援:オーストリア大使館・バーデン市・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知

財団法人高知市文化振興事業団
お問い合わせ 088-883-5071
チケット予約 088-883-5073 / http://www.bunkaplaza.or.jp

高知市文化プラザ かるぽーと

http://www.bunkaplaza.or.jp　E-mail bunshin@i-kochi.or.jp